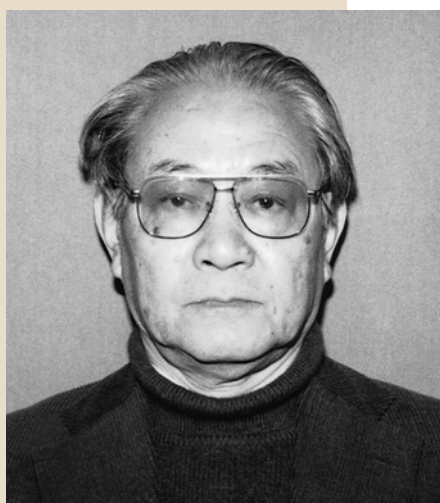


国際的に見た 岡山天体物理観測所について



寿岳 潤
東海大学文明研究所 元教授

第2次世界大戦敗戦後、日本が文化国家として立ち直ろうとしていた時、当時日本の天文学界のリーダーであった萩原雄祐には、既に観測天文学の雄大な構想があった（萩原 1961）。光学天文学についていえば、戦後直ちに、消失した麻布の東大天文学教室を再興するため、36吋望遠鏡の無償譲渡をHarvardのShapleyと交渉している。また1952年ローマで開催された国際天文学連合総会で、より大きい望遠鏡を持つ方策をShapleyと議論した。紆余曲折の後、日本学術会議の決議を得て、Grubb Parsonsの口径188cm望遠鏡を中心とした岡山天体物理観測所が1960年に完成した。当時世界では、岡山188cmより大きい望遠鏡は4基、同じクラスのものが5基あって、したがってPalomarの5m、Mount Hamiltonの3m、Mount Wilsonの2.6mをのぞくとOAOは第1級の望遠鏡を持っていたのである。

その後40年間の望遠鏡建設の歴史はよく知られているので、ここではのべない。わが国の望遠鏡が再び第1線に並んだのは99年の「すばる」である。しかし、それは約1ダースある8mクラス望遠鏡の一つに過ぎず、気の早い研究者は「8mクラスの望遠鏡の時代は終わり、天文学における次の本質的進歩はNGSTと次世代の地上望遠鏡（30mになるのか、それとも一挙に100mに飛躍するのかは別として）によってなされる」という（私はこのような見解に反対である）。

OAOが人類の天文学にどれだけ寄与したかという点については、私の見解は厳しい。しかし、それを客観的に証明するデータを現在持ち合わせないので、他日に譲る。

OAOの最大の貢献は当初から共同利用（宮地 1961）によって運営され、日本の観測天文学（光、赤外）研究者のすべてがOAOによって育てられたことである。最初にのべた口径1.8mもしくはそれ以上の望遠鏡はこの原則に基づいて運営されてきたわけではなく、その意味でOAOは、アメリカのNOAOやヨーロッパのESOに対応する役割を担ってきた。OAOを40年間にわたって支えてきた故石田五郎さん、清水実さん、前原英夫さんをはじめとする現地教職員の方々は、OAOが存在しなければ「すばる」は決して実現しなかった事を誇とされてほしい。

参考文献 萩原雄祐（1961），天文月報，54(1)，4
宮地政司（1961），天文月報，54(1)，7



188cm反射望遠鏡ドーム（1994年）